

# International Symposium on Health Through Oral Health Collaborative Education, Research and Practices 報告

予防歯科学分野 石田 陽子

2013年12月20日(金)～22日(日)に、タイ王国・クラビにて、表記の国際シンポジウムが行われましたので、ご報告いたします。

本シンポジウムは、「国際イニシアティブ人材育成プログラム」の一環として、文部科学省の支援を受け、新潟大学歯学部とプリンス・オブ・ソクラ大学歯学部（タイ王国）の共催で開催されました。

「国際イニシアティブ人材育成プログラム」は、2011年度に文部科学省より採択された3年間のプロジェクトで、大学院医歯学総合研究科・口腔生命科学専攻が推進している再生歯科医学的教育、国際口腔保健教育に焦点をあて、国内外で整備の遅れている再生医療に貢献できる人材育成と国際機関や国内機関の保健医療専門家の育成を目指したプログラムを開発・実施するものです。本年度はプロジェクト最終年度にあたり、シンポジウムは本プログラムでコースを設定している再生歯科医学教育と国際口腔保健科学教育をメインシンポジウムとし、また若手研究者育成のための研究発表セッションや特別講演も組み込まれ、活発な討論が行われました。

開会に際し、本学の前田健康歯学部長から開会宣言、プリンス・オブ・ソクラ大学の Chairat CHAROEMRATROTE 歯学部長から歓迎

の挨拶がありました。

本シンポジウムは以下のように進められました。

## ○基調講演

魚島勝美教授（本学・生体歯科補綴学）

Murray THOMSON 教授（ニュージーランド・オタゴ大学）

最新技術である再生歯科医学に倫理をもって取り組んでいくこと、同時にこれまで長い歴史を歩んできた歯科医療／口腔衛生も継続していくことの両者が将来の患者の利益になると述べられました。

## ○シンポジウム I

Regenerative Dental Medicine

再生歯科医学シンポジウム

座長：泉健次教授（本学・生体組織再生工学）

Premjit ARPORNMAEK-LONG 准教授（プリンス・オブ・ソクラ大学 口腔・顎顔面外科学）

今回は歯科医学研究者のみならず、消化器外科学、眼科学といった上皮細胞再生医学研究者や、「魚のウロココラーゲン」という豊富な天然海洋資源の医療への応用を研究しているグループからの研究者もシンポジストに迎え、非常にユニークな講演を聴くことができました。会場からも関心



写真1：新潟大学／プリンス・オブ・ソクラ大学歯学部共催シンポジウム



写真2：前田／Chairat 両歯学部長の開会挨拶



写真3：魚島教授による基調講演

は強く、活発な質疑応答が行われました。

#### I-a：口腔粘膜上皮細胞の「光と影」

- PRF (Platelet-rich Fibrin) による硬組織・軟組織の再生促進—研究から臨床まで  
Prisana Pripatnanont 准教授 (プリンス・オブ・ソンクラ大学 口腔・顎顔面外科学)
- 組織工学による再生口腔粘膜の臨床応用—試練と成果  
加藤寛子リサーチフェロー (ミシガン大学)
- 培養口腔粘膜上皮シートの眼科における臨床応用、および上皮幹細胞についての新知見：血球系幹細胞との比較から  
梅本晃正助教 (東京女子医科大学・先端生命医学研究所)
- 自家口腔粘膜上皮細胞シートを用いた内視鏡切除術後の食道粘膜再生—現状と展望  
金井信雄助教 (東京女子医科大学・先端生命医学研究所)

#### I-b：魚コラーゲン—医療／産業用に向けた新規生体材料

- 魚コラーゲンの生化学的・分子生物学的特性  
都木 靖彰 教授 (北海道大学・水産学部)
- 魚のウロコから抽出したコラーゲンの物理化学的特性  
生駒俊之准教授 (東京工業大学・材料工学専攻)
- 魚コラーゲンを用いた細胞培養スキャフォールドとハイドロキシアパタイト／コラーゲン複合体の開発  
許哲峰助教 (広島大学・工学部)
- 単方向性多孔質構造を有した骨移植材についての知見  
白井誉訓研究員 (株式会社 クラレ)
- ティラピアウロココラーゲンの歯科臨床応用

柏崎晴彦助教 (北海道大学・高齢者歯科学)

- 魚コラーゲンを用いた生体材料開発についての基準とガイドライン

土屋利江客員教授 (国立医薬品食品衛生研究所／東京医科歯科大学)

#### ○シンポジウムII

Global Oral Health Science Education  
国際口腔保健科学教育シンポジウム

座長：Yupin SONGPAISAN 特任教授

これまで3年をかけ、Yupin SONGPAISAN 特任教授を中心に、国際口腔保健医療専門育成コース (大学院博士課程) のカリキュラム作成を進めてきました。カリキュラム完成を間近に控え、国内外から意見をいただいて最終ブラッシュアップするため、本学演者よりその目的とコンテンツを解説しました。また国内からは広島大学での学部生レベルからの国際化教育をご紹介いただき、インドネシア・タイの各大学からは、学部／大学院で実際に行っている各専門を越えた連携教育や、口腔保健に問題を抱えている地域に実際に赴いて解決に取り組むエクスターンシップの実践について詳しく解説していただきました。本カリキュラムにおいても積極的に英語環境による学修を取り入れ、エクスターンシップを重要と位置付けているので、各大学の取り組みは非常に参考となるものでした。

#### II-a：日本国内での国際口腔保健科学への取り組み

- 国際口腔保健を遂行する人材とは  
宮崎秀夫教授 (本学・予防歯科学)  
Murray THOMSON 教授 (ニュージーランド・オタゴ大学)
- 新潟大学における国際口腔保健科学教育



写真4：セッションI-a ミシガン大学に留学中の加藤寛子先生による講演

- 小川祐司准教授（本学・予防歯科学）
- 広島大学における歯学部国際化教育  
高田隆教授／前歯学部長（広島大学・口腔顎顔面病理病態学）

II-b：外国の大学における国際口腔保健科学教育・学外エクスターンシップの実践例

- インドネシア大学における専門連携教育（インター・プロフェッショナル）の実践  
Bambang IRAWAN 教授／歯学部長（インドネシア大学）
- コンケン大学における国際口腔保健学教育  
Waranuch PITIPHAT 教授（タイ・コンケン大学）
- プリンス・オブ・ソンクラ大学における学外エクスターンシップの実践  
Songchai THITASOMAKUL 准教授（タイ・プリンス・オブ・ソンクラ大学）

○ 新潟大学／ASEAN 歯学部長会議

Education and Research Collaboration

前回のシンポジウムに引き続き、新潟大学／ASEAN 歯学部長会議と題して、ASEAN 諸国の大学歯学部長・国際交流担当／教育担当／研究担当副学部長など22名の参加を得て、朝食をとりながらの会議を行いました。本プロジェクトに基づいて行ってきた数々の事業に関して各大学への謝意を表し、学生・研究者交流をいっそう発展させるべく、意見交換を行いました。さらなる学部／大学院／研究者・教員レベルの交流と相乗効果が期待できます。

○ 特別講演

2013年11月に口腔解剖学分野の准教授として着



写真5：セッションII-a 国際口腔保健科学への取り組み

任された大峽淳先生から、“The Role of OFDI in Tooth Development”（歯牙発生におけるOFDI 遺伝子の役割）と題した特別講演をいただきました。着任前はKing’s Collage London（イギリス）に主任研究者として長く在籍されており、流暢な英語で熱意溢れる講演は口腔組織発生学への関心を強く呼び起こす内容で、大学院生・外国人参加者にもとても印象深いものでした。

○ 研究発表セッション

昨年で終了した「若手研究者派遣事業」では多くの若手研究者が短期～長期にわたり、支援を受けて海外留学を経験いたしました。本シンポジウムでは主に本事業による留学経験者の成果を相互に発表する機会として、研究発表セッションを設けました。

25題の口演発表と、21題のポスタープレゼンテーションが行われました。本学からは、口腔解剖学、予防歯科学、齲蝕学、顎顔面外科学、歯周診断・再建学、小児歯科学、歯科矯正学、摂食嚥下リハビリテーション学、包括歯科補綴学、生体歯科補綴学の各分野から合わせて21名が発表いたしました。本学とプリンス・オブ・ソンクラ大学のほか、タマサート大学やインドネシア大学・ガジャマダ大学から、国内では大阪大学と九州大学からの大学院生が発表されました。英語での口演発表を初めて経験する大学院生もあり、難しいと感じながらもディスカッションでは非常に刺激を受けたという声を多く聞きました。今後の研究者としてのさらなる成長に良い影響を与えられたと思います。

# SCRP 報告

## 平成25年度 SCRП 日本選抜大会のご報告

ファカルティーアドバイザー・  
微生物感染症学分野

小 田 真 隆

平成25年8月21日に第19回 SCRП (Student Clinician Research Program) 日本代表選抜大会が東京の歯科医師会館で開催されましたのでご報告申し上げます。SCRП は、歯科学士の研究意欲の向上、そして、歯科医療の発展を担う歯科学士の育成を目的とし、歯科医師会主催で毎年実施されている英語による研究発表会です。本年度は、全国から22校の代表学生が集まり、白熱したポスタープレゼンテーションが行われていました。本学は、惜しくも入賞を逃しましたが、入賞云々より、研究活動に参加し、「問題提起能力、実験能力、問題解決能力、プレゼンテーション能力、そして、コミュニケーション能力」を養う経験ができたことに大きな意味があると思います。参加した学生さんは、この経験を今後の人生の様々な局面において活かしていただきたいと思います。

私は、平成25年4月に着任後、SCRП のファカルティーアドバイザーを仰せつかり、4年生の

小松貴紀さん、松田義弘さん、都野孝博さんと研究を始めました。研究テーマは、学生が疑問に思っていることの中から、「*Streptococcus mutans* のバイオフィルム形成に対するフッ化物歯面塗布剤の効果」に決め解析を進めました。3名の学生さんは、実験内容、実験結果、そしてポスター作成において、夜遅くまで熱い議論を展開しておりました。時にヒートアップしすぎる場面も……。研究テーマの設定、研究活動、要旨やポスター（英語）の作製を約3ヶ月間で行わなくてはならず、とても苦労しましたが、良い経験をさせていただいたと思っております。今後は、研究活動に興味のある学生を中心とした SCRП サークル（仮称）を設置し、数名ずつ受入れ可能研究室で研究活動に参加させ、学内で発表会（年一回）を行った後、SCRП 発表者（代表者）を決めた方が良いのではないかと思います。

最後に、SCRП の普及やお世話にご尽力くださっている魚島先生（生体歯科補綴学分野）、石田先生（予防歯科学分野）、事務手続きなどをサポートしていただきました神長様、研究活動においてご助言いただいた寺尾先生（微生物感染症学分野）、そして貴重な財政支援を頂戴いたしました歯学部同窓会の皆様には、心より感謝申し上げます。



左から松田、小松、都野



ディスカッション風景

## 2013年度 SCRP を終えて

歯学科4年 小松 貴紀

皆さんは、SCRPをご存知でしょうか。SCRPとは、日本全国の歯科大学生が集い、各々が行った研究を英語でプレゼンし、その内容を競う大会です。私は一昨年の12月、魚島先生の働きかけでこの大会があることを知り、挑戦することに決めました。

もちろん、始めるにあたって、不安がなかったわけではありません。研究の内容や方法、考察の仕方はもちろんですが、日本語でも研究発表をしたことのない自分が英語で発表をすることが一番の不安でした。ですが、今までの人生でこういったことを避けてきた自分は、結果はどうであれ、ここで挑戦することに決めました。そして、昨年の12月に歯学科4年生の都野隆博くん、松田義弘くんを共同研究者として迎え、3人で約半年間楽しく研究を行ってきました。

本年度の研究テーマは「*Streptococcus mutans* のバイオフィルム形成に対するフッ化物の効果」でした。

研究の具体的な内容ですが、う蝕予防のため世界的に応用されているフッ化物は、エナメル質の再石灰化促進などの効果を持つことが知られていますが、虫歯の病原菌として知られる *Streptococcus mutans* に対する効果に関しては、未だ不明な点が多く残っています。そこで本研究では、フッ化物がう蝕病原細菌 *S. mutans* に対して抗菌作用を有するかどうかを調査しました。その結果、フッ化物は細菌の増殖を抑制することが分かりました。

今回の研究の中で大変だったのは、菌の増殖曲線をつくることでした。増殖曲線を描くために、専用の機械を用いておよそ1時間ごとにその濁度を測定し、グラフを作成しました。今回用いた *S. mutans* 菌は、一日ほどかけてバイオフィルムを形成するため、朝に記録をとり始めても、増殖し始めるのが夕方になり、終わるのが真夜中になることもありました。

また、SCRPを始める際に抱いていた不安

は、開始まもなく払拭されました。テーマを与えてくださったり、実験の方法や器具の使い方を一から丁寧に教えてくださった寺尾先生や、小田先生や、英語の発表や発音に関してアドバイスをくださったロクサーナ先生のご指導のおかげで、楽しく、充実した日々を送ることができました。最終的には、先生方に納得していただけるほどのプレゼンができるようになりました。SCRPに参加するきっかけを与えてくださった魚島先生、石田先生をはじめ、協力してくださった先生方、先輩方にはこのような貴重な体験をサポートしてくださいまして、本当にありがとうございました。非常に心強かったです。

最後に後輩に伝えたいのは、このような自分の糧となる体験は、迷っているなら、今すぐ実行に移したほうが絶対に後悔しないということです。自分には無理だと思っても、とりあえずやってみる。そういう気持ちも重要だと思います。

SCRPに出場したこと、英語でプレゼンができたこと、SCRPを通じて新たな仲間が増えたことは、私の貴重な財産となりました。これらのSCRPの経験を今後の臨床に役立てていきたいと思っています。

## 「研究 新たな一歩 共同研究者からみた SCRP」

歯学科4年 松田 義弘

大学生活が始まってから早4年がたった。ここまでの学生生活で学んだことは多い。その多くは臨床に関する内容であった。1年生の頃の早期臨床実習から始まり、いま4年として学んでいることは、9割が臨床で使うことである。研究に関わりそうな基礎科目は1・2年生の頃に教わった。確かに実験などはやった記憶はあるのだが、今では記憶は薄れてしまっている。様々な講義でそれぞれの分野の研究の功績について聞くことはあっても、その研究方法は解らず、解らないが故に自分にはまず進めない道だろうと遠ざけていた。学生の皆さんも講義で、例えば免疫機能に関する発見や、骨膜シートの骨再生への利用など、医学界

に利益をもたらす研究結果や、その結果がどのように導かれるのかということは聞いていると思う。なんなら、それら有益な研究の再現実験を行ったこともあると思う。しかしながら、研究室で実際にどのようなことが行われ、どのようにデータが処理され、結論がだされているのかについては解らないのではないかと思う。嘗ての私のように端から研究という道を全く考えない人も多いことだろうと思う。

それでは、私の変化と、共同研究者について話していこうと思う。とあるきっかけがあり、そんな私が研究をやってみようと思ったのは去年の夏のこと。当初は、自分にも研究ができるのかの見極めと、今まで気にはなっていた研究の手順だけでも垣間見られれば良いという気持ちであった。そのような感覚で始めた私にとって、共同研究者という立ち位置は非常に動きやすかった。SCRIPは各大学から発表者が1名までしか選出されない。プレッシャーや責任感を持ち行動する覚悟が必要である。共同研究者には責任感がないわけではないが、少なくとも本番前に厠にこもる必要はないのである。(私が発表日、発表者のプレッシャーを代わりに背負い、厠にこもっていたことは同志のみが知ることである)。研究はメンバーで分担・協力しながら行うので、研究の楽しさ、つらさ、難しさは十分に体験することができる。発表者以外は冊子に写真も載らないし、粗品も寂しめではあるが、純粋に研究のみをやりたい、体験したいという人にはもってこいのポジションであるとお勧めする。研究を終えてみて、正直なところ、発案、実験、データ処理、考察をこなす力は今の自分にはまだまだないと思い知らされた。だが、少なくとも、研究という道とは、すれ違いざまに会釈ができるくらい、親近感湧いている。自分の学生時代の経験として、一つの大きな財産になり、且つ人生の選択肢が一つ増えたことは間違いない。

最後に、今回私の背中を押してくださった、魚島教授、研究する場を提供してくださったMIDの皆様、丁寧な説明で、右も左もわからない私に様々なアイデア、ご指導をくださった寺尾教授、小田准教授、東京で応援してくださった石田特任

助教授、先輩、居酒屋でSCRIPの楽しさを語ってくれた先輩、その他協力して下さった皆様方、そして共に悩み、苦しみ、喜びを享受した同志に心をこめて謝辞を贈りたい。「ありがとうございました。」

## 学生でありながら研究すること

歯学科4年 都野隆博

歯学部4年の都野隆博です。今回は共同研究者として参加したSCRIPを通して学んだことについて報告したいと思います。

SCRIPとはStudent Clinician Research Programのことであり、学生が自分たちで研究した内容を臨床部門と基礎部門のどちらかで発表する大会のことです。日本大会は毎年8月に行われており、優勝チームは世界大会への参加権が得られ、多くの国が参加しています。なぜこのような大会に参加したのかですが、歯科医師を目指すと言ってもその道は大きく分けて臨床と基礎研究に分けることができ、私自身どちらの道が自分に適した道なのか未だに分からず、今回のような大会に触れてみることで具体的な将来像が見えてくるのではないかと思ったからです。もちろん患者様に直接関わる臨床を学ぶことはとても大事ですが、その臨床を支えるのは基礎研究であり、基礎知らずして臨床を行うことはあり得ないと言えるでしょう。大会での発表に向け、学生ながら研究を行えたことはとても大きな一歩となりました。

今回の私たちの研究内容は「*Streptococcus mutans*のバイオフィルム形成に対するフッ化物歯面塗布剤の効果」というもので、歯面塗布剤に含まれるフッ化物が*Streptococcus mutans*の増殖、歯面への付着、バイオフィルム形成などにどのように影響しているのかを研究しました。実際、当日の発表自体は発表者1人のみしか行えないため、前日まで共同研究者の私たちは小松君の発表を聞いて、質疑応答の対策を考えるなどを行いました。当日は他大学の様々な研究内容も閲覧することができ、そのハイレベルな内

容に圧倒されるばかりです。発表は英語のプレゼンテーションで行われ、優勝者の発表を見たのですが、話し方や身振り手振り、プレゼン能力はとても素晴らしいものでした。同じ学生でありながら他大学の学生の精良な発表内容や発表に驚くと同時に、自分たちの研究に対する努力や考察の甘さを痛感しました。

当日の発表後の懇親会では他大学の学生や SCADA-Japan (SCRIP 大会の同窓会組織) の方々とお話する貴重な場となりました。歯科学生として今後どのように努力していくべきか、どのような歯科医師を目指すべきかなどを考える大変有意義な時間を過ごすことができ、まだまだ未熟な自分を鼓舞する十分な刺激となりました。

学生のうちに経験できることはできるだけ経験しよう、様々なことに積極的に挑戦して人生や歯科医師になるための糧にしようと日々の大学生活で考えるようになり、今回の大会参加もそのうちの大きな一つとなりました。学生は知識が定着していないのだから研究なんてまだ早い、そうした考えももちろんあると思いますが、“百聞は一見に如かず”であり、実際に見ること・自らやってみることが最善であると自分は思っており、大会参加を通してその考えはとても強くなりました。最後に、大会に参加するにあたり御指導して頂きました寺尾先生や小田先生をはじめ、お世話になりました多くの先生方には感謝の念に堪えません。この場をお借りして御礼を申し上げたいと思います。



# 平成25年度留学生交流支援制度(短期派遣/短期受入れ)報告

## 2013年度 短期留学受入報告

予防歯科学分野 石田 陽子

多様な学生の受け入れや派遣を支援するプログラムとして、日本学生支援機構(JASSO)による留学生交流支援制度(ショートステイ/ショートビジット)が2011年度より開始されました。2013年度は、留学生交流支援制度(短期派遣/短期受入)と一部名称が変更されました。多くの大学・学部が本事業に申請し、競争が厳しくなっている中、本学歯学部はこれまでの実績が認められ、派遣/受入ともに採択を得ることができました。

本年度はインドネシア大学、ガジャマダ大学(いずれもインドネシア)、タマサート大学、コンケン大学、チェンマイ大学、プリンス・オブ・ソクラ大学(いずれもタイ)、国立陽明大學(台湾)、コアウイラ自治大学(メキシコ)の各歯学部より10日～3ヶ月程度、合計20名の歯学部生/大学院生を短期交換留学生として受け入れました。

歯学部学生はローテーション学修として、口腔解剖学、口腔生理学、微生物感染症学(本年度より)、予防歯科学、摂食嚥下リハビリテーション学、小児歯科学、歯周診断・再建学(本年度より)、口腔再建外科学、顎顔面外科学、生体歯科補綴学、歯科矯正学の各分野と、インプラント治療部、総合診療部にて、それぞれの教員による指導の下に診療見学をしたり講義を受けたりしました。

とくに8月には、8名という大勢の留学生が一斉に来学しましたので、歯学部長・担当教授を交えた歓迎会を開催し、懇親を深めました。また、短期留学生の指導に際しては、本学の教員がすべて英語で講義・実習を行いますので、夏休み中の日本人学生にも英語で歯学を学ぶ良い機会と思い、「国際サマーセミナー」と銘打って本学の2年生・3年生にも参加してもらいました。

週末には本学の短期留学経験者により金沢旅行



写真1：国際サマーセミナー。歯学科学生の窩洞形成シミュレーション実習



写真2：留学生、教員、本学からの留学経験学生の懇親会



写真3：タイ・台湾の学生との金沢旅行。兼六園

が企画され、楽しい時間を過ごしました。

また大学院生では、コアウイラ自治大学より博士課程の学生が2名、生体組織再生工学・歯科矯正学に滞在・学修いたしました。

以下、ガジャマダ大学3年生のRamadaniaさんによる滞在記(抜粋)を紹介いたします。

After two weeks study in faculty

of Dentistry Niigata University, there're some improvements that I could experience. 1) The Technology. I learned more about developed technology that're not commonly used in my country such as videofluoroendoscopy, electromyograph, brain activity devices, videoendoscopy, simulation training system for restorative dentistry 2) Science. I also learned about some case approaches, materials, examination strategy, and some development in the term science of dentistry 3) Research activity. Niigata University that well-known for its developed research activity also allowed us to take a look for the methodology, experiments, devices, brand new materials, and trends in research activity 4) Education and oral health environment in Japan. This program also gave us the opportunity to see the oral health environment in Japan like how's the oral health service in the nursing home, fluoride mouth rinse program for elementary school students, the insurance system, and 8020 concept.

The program of the study was focus on how's the student could be a talented dentist working in global community. If I had to summarize, there're three type of programs that I experienced: lecture, clinic visit, and group discussion. After two weeks study, I felt that this's a very good experience for me which I could learn more about dentistry since this program's allowed us to have a lecture in each division of dentistry. Also the clinic visit was



写真4：メキシコからの大学院生。生体組織再生工学にて実験中

very useful to understand more about our future working environment, the case, the patient, the management, the technology, and so on. Student also encouraged to be active in group discussions in every lecture and other programs, for example: the journal club session.

This study's really encourage me to be brave to communicate and being a part of global dentistry community. Participate on this study also gained me so much confidence to be more active and had some critical thinking about the science of dentistry. Some lecture about global oral health also created a huge inspiration for me to be a worldwide role dentist that participate for creating a better world health. Participated on this kind of study's not only create a great experience for us to learn more about our major but also can provide us more understanding to various cultures, friends, and differences among the global community. Thank you for the good opportunity :)

## 台湾・陽明大学訪問記

歯学科3年 小泉英之

私は日本学生支援機構(JASSO)による留学生交流支援制度(短期派遣)の一環として台湾の台北にある陽明大学に2013年8月1日より約二週間滞在させていただきました。短い期間ではありましたが、密度の濃い時間を過ごすことができましたと思います。

台湾の空港に着いたときは、暑かった昨年より日本よりもさらに暑く、亜熱帯の国に来たことを肌で感じることができました。そこにはすでに陽明大学の先生と事務員の方が迎えに来てくださっていました。事務員の李さんは流暢に日本語を話せるので、滞在期間中はとても頼りにさせていただきました。台湾に着いたその日は、食事へ連れて行ってくださったり、電車の乗り方の説明をはじめ、私たちが滞在することになる寮の事など、台湾で生活するための細かい準備までいろいろと教えていただきました。2日目の午前中は歯学部長に挨拶に行き、午後から病院の本格的な見学が始まりました。台湾では主に先生に付いての病院見学が中心でした。

見学は歯周病科から始まり、矯正、歯内療法、小児歯科、総合診療科、口腔外科、補綴科の順で、一つの科に1日か2日ずつ回りました。見学は朝の8時半から始まり、12時から1時間昼休みを挟んで、午後5時半まで続けました。また、最後の日には滞在中のレポートを提出することが課せられていました。病院内には歯学部だけではなく、医学部の各科も一緒にあり、患者様が簡単に様々な科を行き来できるように工夫をされていました。

見学中は英語で説明をうけたのですが、見学させていただいたどの科の先生も英語が非常に流暢でした。わからない単語など聞いたら簡単な言葉に言い換えてくださったり、説明を加えてくださったりしたのですが、英語力の違いをひしひしと感じました。ちなみに、台湾では英語教育に非常に力を入れており、歯学部の授業は英語で行われています。



休みの日や放課後は先生が食事に誘ってくださったり、学生が様々な観光地に連れて行ってくれました。特に印象的だったのが、士林夜市と九份でした。夜市はかなり広く、放課後だけでは回りきれないほど多くの夜店がありました。また、九份は台湾でも歴史ある町で、千と千尋の神隠しのモデルにもなったこともあり、かなり多くの観光客で賑わっていました。

このように、私の台湾での滞在はとても充実したものだったと思います。もちろんこれだけ快適に過ごせたのは新潟大学と陽明大学の多くの先生方や事務員の方々のおかげで、とても感謝しています。

新潟大学の歯学部では夏と春、年に2回こういったプログラムで海外に行く機会が得られます。今年の春もインドネシア等の大学に行くことができるという案内が全学年に回ったのですが、私の周りの友人に行ってみないのか尋ねてみたところ、英語が出来ないから不安で、という人が多かったです。私もいきなり海外に行くのは不安という思いはありました。しかし、実際に行ってみれば、台湾は日本と同じく英語が母国語ではないので、一般の人たちの話す英語は聞き取りやすく、簡単な単語中心ですので、自分の英語でもなんとか伝わるといことがわかりました。また、毎日英語を話す必要に迫られるので嫌でも英語を上達させるいい機会にもなりました。もし迷っている人がいるならば一度参加してみるべきだと思います。

## タイ・チェンマイ大学訪問記

歯学科3年 都丸 怜奈子

私は日本学生支援機構(JASSO)による留学生交流支援制度(短期派遣)プログラムの一環として、昨年の8月にタイのチェンマイ大学を訪問させていただきました。この場をお借りして、2週間の滞在についてご報告させていただきます。プログラムでは、大学の歯学部の病院見学のみでなく、他の地区の病院見学、小学校の口腔衛生向上プログラムの発表会、移動診療所の見学、障害者施設での保健指導、学生の調査の見学、プランテーション、ホームステイ等をさせていただきました。

病院の歯科の見学では、歯科の専門の勉強を始めていないために分からないことも多くありましたが、歯科で顎顔面領域に限らず、目や耳といった顔全体の補綴を対象としていたこと、日本では使われていないアマルガムによる治療の見学など、タイの歯科医療に間近に触れる経験ができました。プログラムの中でも特に、障害者施設での保健指導が印象的でした。歯学科では保健指導を行う機会がないので初めての経験に不安もありましたが、生徒さんや施設の先生に温かく迎えてもらい、日本語、タイ語、英語を交えてとても楽しく行うことができました。30分程度の短い時間の交流でしたが、「日本」の文化や言葉を一生懸命に理解しようとしてくれた生徒のみなさんの姿勢と私たちを迎えてくれた笑顔は忘れられない思い出です。

歯学部の学生との交流、現地での滞在中を通して、日本を外から見る視点を持つことができたと思います。学生との交流で驚いたのは、語学力の高さとタイの歯学教育に英語が多く取り入れられていることでした。対応してくれたどの学生も英語でごく普通にコミュニケーションをとっていました。学生は病理学や解剖学などの専門教科の一部を英語で勉強していたり、病院ではカルテが英語で書かれていたり、スピーキング力だけでなく多方面で英語に慣れている環境であると感じました。日本と比べて国際的に開けた歯科医療という



印象を受けました。

そして、多くの学生が海外留学に積極的で、現地では留学経験のある学生と多く知り合いました。中には英語のみでなく韓国語や日本語も勉強している人も珍しくなく、タイ語を含めて4ヶ国語話せるという友達に2人も出会いました。

日本と異なるタイの歯科医療に触れたことで良い刺激になり、日本での歯科教育のあり方について考えるきっかけになりました。そして、自分の英語力の不足を痛感するとともに、歯科の専門分野を英語で学ぶことの重要性を感じました。

今回の短期留学では、チェンマイ大学の先生方や学生のおかげで多くの貴重な体験をさせていただきました、自分の視野を広げる良い機会になりました。2週間という短い期間でしたが、様々な人と出会い、温かく迎えてもらい、交流できたことでタイをより身近に感じられるようになりました。それと同時に、自分がこれから歯科を学ぶにあたってのモチベーションを得ることができた滞在中でした。

## タイ・タマサート大学訪問記

口腔生命福祉学科3年 西川 実沙

私は今年8月に、日本学生支援機構(JASSO)による留学生交流支援制度(短期派遣)プログラムの参加学生として、タイに短期留学をしてきました。タイは東南アジアの中心に位置し、国面積は日本の約1.4倍、人口約6000万人、年間の平均気温は約29度と熱帯性の気候で雨季と乾季があり、日本のように四季はありません。約2週間の滞在中ではあったのですが、現地の学生達



に色々な所へ連れて行ってもらったり、ゾウに乗ったり、初めてドリアンを食べたり、食あたりしたりと、毎日が非常に濃く、驚きの連続でした。ここでは書ききれないことも多くあるのですが、まだ短期派遣プログラムへ行ったことのない方にも興味を持ってもらえるように、タイに行って経験したこと、気付いたことを書きたいと思います。

まずはじめに、口腔生命福祉学科である私には驚きだったのですが、タイには歯科衛生士という職業はなく、代わりに“dental nurse”というものがあることが分かりました。タイではまだまだ歯科医師が不足しており、それを補うために作られた経緯があり、役割的には日本の歯科衛生士や歯科助手と同じようなものではあるのですが、日本との大きな違いは、国家資格ではないこと、歯科医師の指導の下、なんと抜歯！ ができることです。今回は実際に現地の dental nurse の業務を見ることは出来なかったのですが、タマサート大学の歯学部先生と地域の保健センターへ訪問診療に同行させていただいた際、農村部では特に高齢者が多く、治療が必要でも放置されている人、無歯顎でも義歯を持たない人等が多い

ることが分かりました。歯科治療を受けたくても、地域に歯科医師がおらず、交通の便も悪いため、その必要性を改めて感じました。

また、タマサート大学の歯学部生から話を聞くと、農村部だけでなく、タイ全体において、人々の歯科への認識は日本に比べるとまだまだ低いのだそうです。それを改善する試みとして、同大学の歯学部6年生が、自分の大学の学生達へ向けてスクリーニング調査を行い、同時に歯ブラシやフロスの使い方をアドバイスしたり、歯科を受診するよう呼び掛けるイベントが行われていました。この他にも、6年生が行っているタイのナカンパトム地域でのプロジェクトに参加することが出来ました。その地域では、人々が地下水を飲むようになったことで子どもの斑状歯が問題となったため、その地域の水質検査と小学校でのう蝕や斑状歯の調査を6年生が行っていました。子どもたちへのう蝕やフッ素に関する教育や情報提供も同時に行われ、学生たちは、子どもたちと一緒に外でゲームやレクリエーション行なうなかで、フッ素の歯に対する影響をわかりやすく説明し、またう蝕になりやすいお菓子を当てるゲームなども行われていました。

スクリーニング調査をはじめ、ナカンパトム地域でのプロジェクトもほとんどが学生のアイデアで始まったものです。授業としてではなく実際に直面している問題に対して議論を交わし、解決していくという経験が自分にはなかったため、彼らを見て、普段からもっと意識をして問題を発見し、PBLの経験を活かしていくべきだと強く感じました。

留学へ行く前は、「まさか自分が海外へ行くなんて……」と人ごとのように思っていましたが、何も分からないまま、それでも行ったことで様々な経験をし、拙い英語でも相手に伝えようとする事の大切さを知り、また将来のことについての視野がかなり広がったと思います。同時に自分の不勉強さも痛感しました。今回の短期派遣プログラムでは様々な人にお世話になりました。学生生活も残すところあと1年程となりましたが、機会があればまた海外に行きタイです。

## タイ・コンケン大学訪問記

歯学科6年 西宮 結



今夏、日本学生支援機構（JASSO）による留学生交流支援制度（短期派遣）プログラムにより訪問させていただきましたコンケン大学はイーサーン地方というタイの東北部に位置します。

コンケン大学は、17学部が存在し東京ドーム193個分の広大なキャンパスを持つタイ東北部最大の国立大学です。臨床実習が始まり数ヶ月の学生の立場で、今だからこそ世界に目を向けてみて、感じられることや考えさせられることがあるのではないかと思います、参加させていただくことを決めました。では、学生という私の立場から感じたことを少しお話したいと思います。研修中は主にDental Clinicsを見学させていただきました。病院では5、6年生が実習を行っていましたが、日本との大きな違いは、どの科においても学生が診療に参加する機会が多いという点でした。学生には新潟大学同様、ミニマムリクワイアメントが存在しますが、私たちとは比べ物にならないほどケース数が多かったです。タイで学生が治療に参加できる機会が多いこと背景として「治療費」が大きく関係しているのではないかと考えます。日本では保険治療での治療費は一律に決まっており、学生と歯科医師に差はありませんし、大学病院と開業医での差もありません。しかし、タイではまず開業医と大学病院で治療費が約5倍異なり、また大学病院の中でもUndergraduate-studentとPost-graduate-studentとSpecialistで大きく異なります。ほとんど全ての治療において治療費に差が設けられているため、より治療費を抑えたいという患者様は大学病院を訪れ、学生を選択することも多いのではないのでしょうか。タイでこのようなシステムを目の当たりにして、ふと私たち学生の臨床実習に協力してくださっている総合診療部の患者様が思い出されました。日本ではこのようなシ



ステムがない中で、私たち学生が担当することを快く承諾してくださる理解のある患者様がいるということ、非常に恵まれた環境で実習が行えているということを改めて実感したのを覚えています。コンケン大学では、月に一度のRoyal Mobile Dental Clinicというプログラムが特徴的です。今回、運良く参加させていただくことができました。このプログラムは近くに歯科医院がない・貧しいといった理由で治療が受けられない方々のために国の援助で治療を提供するというものです。今回はノンブアラムプー州というコンケンの北に位置するところに向かいましたが、所々で道が整備されていない、下水道がまだ整備されていないなど衛生的にも決して十分とは言えないようなところでした。設備としては簡易ユニット14台で、4つのゾーンに分かれており問診口腔内診査ゾーン・スケーラーゾーン・抜歯ゾーン・保存修復ゾーンがありました。衛生的な面では不十分な点もありましたが、器具も一通り揃っており診療室に近い治療がされていました。私も介助をさせていただきましたが、日本では見ることがほとんどないような歯冠崩壊した歯、口腔内を多く見ることができました。タイでは歯科医師が不足しているとは聞いていましたが、実際

に目で見て、まだまだ多くの課題が残されているのだと実感しました。

タイでの研修中は、主に歯学部 of 学生達にお世話になりました。彼らはどんなときでも親切で、Clinic で私たちの姿を見るや否や、積極的に話しかけてきてくれました。また、ほぼ毎日のように放課後の相手もしてくれ、多くの時間を共にしました。実際に友人のお宅でタイ式の「おもてなし」をしてもらったり、以前 SSSV で新潟大学に来たチェンマイ大学の友人と再会することができたのもまた良い思い出です。

臨床実習やマッチング、国試勉強で忙しい中での参加でしたが、この時期に参加させていただいて非常に勉強になったと感じています。一日一日が貴重でしたし、充実した学生最後の夏休みを送

ることができました。タイにいる間、ふと思いつかんた日本の言葉は「一期一会」でした。タイで多くの方々に出会い、たくさんお世話になったこと、国は違えど互いに同じ目標に向かって頑張っていくと学生達と誓い合ったことは、今後忘れることはないでしょう。日本に帰ってきてから、コンケン大学の2名の学生が新潟大学に来ましたが、2人とも非常に有意義でたくさん学ばせてもらったと言っていました。私も再会できた喜びを感じ、NEXUS の皆さんや友人たちに協力してもらいながら2人の面倒を見ることができて良かったです。最後になりますが、この場をお借りして、今回の短期派遣プログラムの細やかな手配や調整、引率をしてくださった先生方に深く感謝申し上げます。

---

---

## APDSA 参加報告

---

---

歯学科4年 目黒史也

この度、私は昨年8月19日から24日に、インドネシアのバリ島で開かれました、アジア太平洋歯科学学生会議 (Asian Pacific Dental Students Association ; APDSA) に参加させていただきました。

これをお読みの方々にもなかなか馴染みのない会議だと思しますので、簡単に説明させていただきますと、年に一度、主に夏季に環太平洋のアジア諸国の歯科学学生が開催国に一堂に会し、共に学び、共に遊び、国境を越えた交流を深めようという目的の国際会議です。今年で通算40回目となる歴史ある会議であり、もともとはアジア太平洋歯科連盟 (APDF) の学生部門として設立され、驚くべきことに1968年の第一回会場は日本の東京でした。

そんな大きな会議ですが、歯科学学生、歯科医師

であれば基本的に参加は自由です。

費用は全額負担のため、安くはない出費となりますが、私も今年がラストチャンスと考え、覚悟を決めて参加しました。

APDSA は会議といっても学生たちがディベート大会を行うのではなく、大きく分けて3パートに分かれています。

一つ目は SRC。SRC とは Science Research Competition の略で、学生たち自ら行った研究内容を発表するものです。プレゼンテーションとポスターの2部門があり、どちらも学生の意欲の高さをうかがわせる内容にあふれていたと思います。

二つ目は Lecture。APDSA の OBOG には各国で著名な歯科医師の先生方、研究者の方が多数おり、通常では聞くことのできない貴重な

お話を講義として受けることができます。しかし、内容はもちろん歯科の専門的な話であり、言語は英語です。私も必死に食らいつこうと努力しましたが、やはり自分の能力の低さを実感する機会となりました。

そして最後の一つはもちろん leisure、観光です。ホストの学生たちは私たち参加者のために様々な観光プログラムを用意し、またいくつかのプランは自分の好きなものを選ぶことができます。今年はバリ島という一大観光地での開催でしたので、ダイビングやシュノーケリングといったマリンスポーツはもちろん、旧跡の観光や、ケチャダンス、アニマルサファリなど、実に多種多様なアクティビティが用意され、思う存分楽しむことができました。(2014年はカンボジア開催です。)

何より、違う国の異なる文化や社会の中で、同じ歯科医師を目指す同志として様々な考え方や意見を持ち、お互いを尊重しあいながら、友達と過

ごした4日間はかけがえのない時間であり、この参加を通して出会うことのできたたくさんの友達は、私にとって貴重な財産であると思っています。

当然のことながら、渡航中から英語を強制的に使う環境におかれますから、英語のコミュニケーション能力UPにもつながります。

こんなにいいこと尽くめで、参加を躊躇う必要がどこにあるでしょうか。

これを今読んでいる学生のあなたにも、私はAPDSAの参加を強くお勧めします。

英語が不安？ 海外での生活が不安？ 何となく不安？

ただ知らないだけの躊躇いには耳を貸さず、一歩を踏み出してみませんか？

未知への不安に打ち勝った暁には、まだ見ぬたくさんの友人と経験に出会えることをお約束します。



# 歯学体報告

## 三年目のデンタルを終えて

歯学科3年 堀 頌子

歯学部卓球部は今年の7月31日から8月2日まで埼玉県の熊谷スポーツ文化公園にて第45回全日本歯科学学生総合体育大会に参加してきました。

真夏の熊谷は本当に猛暑で、体育館内も閉め切りの大変暑い中での試合でしたが、団体戦においては、女子団体が準優勝という快挙を遂げることが出来ました。

男子に関しては少ないメンバーの中一人一人が精一杯頑張ったものの、惜しくも予選リーグ敗退という結果でした。

個人戦に関しても新入部員含め皆がそれぞれベストを尽くし、それぞれのベスト記録を更新するなど結果を残すことが出来ました。この結果は、それぞれにおいてこれからの新たな自信に繋がったのではないかと思います。

他の大学を見ていると毎年そうですが、今年の結果も通して、部活のチーム全体の結束の強さが勝ち進む秘訣なのではないかと感じられました。例えば、周りの部員の応援やサポート、アドバイス一つで選手の精神状態や次のセットへの戦略等が大きく変わってきます。このあたりの結束がしっかり出来ていることが大切だと染み染み感じる大会となりました。

また、試合以外に関しても触れたいと思います。デンタルでは毎年試合の前日到着で、この日に観光を行うのが伝統となっています。今年は埼玉の川越まで足を伸ばし、昔ながらの町並みを楽しんできました。お菓子横丁、時の鐘、という歴史的な鐘(これは決まった時間に鐘を鳴らされます)などを観光してきました。川越は町並みや建築物自体が蔵造りになっていて江戸時代の建築を意識したものであり、ゆったりと散歩するのに最適でした。

そのほかに夕飯にはフライ焼き、という熊谷ご当地名物も食べました。これはお好み焼きによく似た外見をしているのですが、大変もちもちしていて、中の具も様々で選ぶことが出来ます。味、食感共に今までに食べたことのないような料理で今でも忘れません。これは一度食べてみないと何とも分からない料理だと思います。

歯学部卓球部は現在、男女合わせて11人の部員が毎週月、火、金と活動しています。月曜日と金曜日は医学部の卓球部とも合同で練習を行っており、皆日々実力の向上に励んでいます。

卓球は思ったよりもハードなスポーツです。私は中学の時に卓球部に所属した経験があり、現在はもう一度大学で卓球部に入部し、早いものでもう三年が経ちました。卓球部に入って思うことは、卓球は大変奥深く、やればやるほど疑問や課題が増えるという、不思議で、しかしだからこそ面白



く長続きするスポーツだということです。また、デンタルや他の定期戦を通して、全国各地の様々な県を観光し、色々な県の人達と交流を深められるという点も大変意義があると思います。

また、卓球はよくメンタルスポーツと言われるますが、試合をする度に私自身それを強く感じます。勝つためには当然実力を身につけることが前提にあります。試合の時には、たとえ実力が高い人と低い人とが試合をしたとしても、その日その時のメンタルがそのまま試合に大きく影響してしまうため、実力が低い人が勝つということも十分有り得ます。

私は卓球部に入ったことにより、多くの試合などを通して、どんな時でもメンタルを強く持つ、という点において精神力を鍛えるのに大変良い経験をさせてもらっていると思います。これは今後歯科医師となる上でも、また日常生活においても大変重要な意味を持つと思います。

今年も昨年のデンタルの結果や経験を活かし、反省点や目標を新たに掲げ、部員一同練習に一層励んでいこうと思います。

また常日頃温かな応援、ご指導をしてくださる卓球部の先生方に心より感謝し、この場を終わらせて頂きたいと思います。

## 行け！ 新大バスケットボール部

歯学科3年 中村 彬彦

この度、部活紹介をさせて頂くことになりました男子バスケットボール部部長の中村です。本特集のタイトルが“飛び出せ新潟”とのことなので、実際に私たちの“体”が新潟から出たときの話と“心”が新潟を飛び出したときの話をしたいと思います。

ではさっそく……とはやる気持ちを抑え、まずは軽く私たちの紹介をします。バスケットボール部は男子部（10人）と女子部（24人）とから構成され、男子・女子部共に週3日、火・土・日と旭町第二体育館で2時間の練習を行います。練習にはOB・OGやその御友人が多く参加して下さるため、現役プレイヤーたちにとって良い刺激と



なっています。先生方にはこの場を借りて感謝申し上げます。

それでは本題に入りたいと思います。まずは実際に私たちの“体”が新潟から出たときの話です。私たちは春と夏に大きな大会（北日本大会とデンタル）を迎えます。今年はそれぞれ福島県と千葉県で行われ、私たちは“新潟から飛び出し”しました。北日本大会はゴールデンウィークに行われる大会で、成人式と重なるため基本的には2年生以上の参加となります。今回は男子部が全敗、女子部は参加チーム不足でトーナメントが行えないという残念な結果に終わりました。人数の少ない男子部にとって北日本大会は鬼門であり、1日2試合というハードな日程です。替えがないのは正直きついです。頑張っています。女子部は参加チームが少ないのが常で、今回は選手を混ぜての試合を行いました。女子部は昨年度準優勝という素晴らしい結果を残しています。デンタルは1日1試合かつ1年生も参加可能なので北日本大会よりは良心的な大会です。しかし、参加チームが多く強豪と当たる確率が高まるという欠点もあります。予選トーナメントのブロックはくじ引きにより分けられるために、部長の引きの良さが私たちの運命を左右すると言っても過言ではないかもしれません。今年は8月頭に行われ、男子部は決勝リーグにあと一歩というところで予選リーグを敗退、女子部は決勝リーグまで勝ち進みました。北日本大会、デンタル両大会はレセプション・試合を介して他大学と親交を深めるいい機会であり、友達の輪が新潟から広がるという大きな利点があります。また、今回は誰もケガをすることなく無事に終わることができました。

続いて私たちの“心”が新潟から飛び出した話をします。これは昨年秋、短期留学生を招いての練習を行ったことで起こりました。きっかけは留学生の一人がバスケ部に所属しているとの情報を得たこと。海外の方とバスケットボールを介して触れ合うことで、私たちの“心”は“新潟から飛び出し”ました。詳しく書きたいところなのです

が文字制限があるので割愛します。この話に興味がある方またはバスケットボール部に興味の出た方は是非声をかけて下さい。心よりお待ちしております。

最後になりましたが、これからもバスケットボール部を宜しくお願い致します。

